

Title	聖徳太子絵伝における図像選択：橘寺所蔵八幅本を例に
Sub Title	The iconography of Illustrated biographies of Prince Shōtoku : a study of the Tachibana Temple scrolls
Author	鈴木, 照葉(Suzuki, Teriha)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.148 (2021. 10) ,p.127- 141
JaLC DOI	
Abstract	The subject of this paper is the eight scrolls of The Illustrated Biography of Prince Shōtoku kept at Tachibana Temple in Asuka. Even though the scrolls are in an excellent state and painted in bright colors, the scrolls have rarely been studied. One explanation for this might be that scholars have dismissed the scrolls as a simple rearrangement of classical illustrated biographies of Prince Shōtoku. This study focuses on the composition and iconography of the Tachibana Temple scrolls. An analysis of its compositions reveals that the scrolls were based on the division of space based on diagonal lines from the Hōryū-ji Temple Panels of The Illustrated Biography of Prince Shōtoku. However, its traditional order was changed on purpose, breaking their uniformity and enriching the scenes. Since the iconography of the Tachibana Temple Scrolls closely resembles the scenes from Prince Shōtoku's Biography of the Hōryū-ji and Kōfuku-ji Temple versions, the author argues that the Nantō Edokoro (Nara Painting Atelier) of Kōfuku-ji Temple was involved in its creation. This atelier was intimately connected to Hōryū-ji Temple and Prince Shōtoku.
Notes	特集：林温教授 退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000148-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖徳太子絵伝における図像選択

—橘寺所蔵八幅本を例に—

鈴木 照 葉*

The Iconography of Illustrated Biographies of Prince Shōtoku A Study of The Tachibana Temple Scrolls

Teriha Suzuki

The subject of this paper is the eight scrolls of *The Illustrated Biography of Prince Shōtoku* kept at Tachibana Temple in Asuka. Even though the scrolls are in an excellent state and painted in bright colors, the scrolls have rarely been studied. One explanation for this might be that scholars have dismissed the scrolls as a simple rearrangement of classical illustrated biographies of Prince Shōtoku. This study focuses on the composition and iconography of the Tachibana Temple scrolls. An analysis of its compositions reveals that the scrolls were based on the division of space based on diagonal lines from the Hōryū-ji Temple Panels of *The Illustrated Biography of Prince Shōtoku*. However, its traditional order was changed on purpose, breaking their uniformity and enriching the scenes. Since the iconography of the Tachibana Temple Scrolls closely resembles the scenes from Prince Shōtoku's Biography of the Hōryū-ji and Kōfuku-ji Temple versions, the author argues that the Nantō Edokoro (Nara Painting Atelier) of Kōfuku-ji Temple was involved in its creation. This atelier was intimately connected to Hōryū-ji Temple and Prince Shōtoku.

* 慶應義塾大学大学院

はじめに

本稿で対象とする八幅本聖徳太子絵伝は、聖徳太子由縁の寺院である橘寺所蔵の作品である（以下、橘寺本）。本作で選択された図像として、これまで秦致貞筆十面本聖徳太子絵殿絵伝（延久元年〔1069〕、東京国立博物館）（以下、致貞本）や上野法橋・但馬房筆四幅本聖徳太子絵伝（嘉元3年〔1305〕、東京国立博物館）（以下、但馬房本）の存在が指摘されてきた¹。本稿ではこれらに加え、遠江法橋による制作とされる六幅本聖徳太子絵伝（鎌倉時代〔14世紀前半〕、大阪・四天王寺）（以下、法橋本）および四幅本聖徳太子絵伝（鎌倉時代〔14世紀前半〕、静嘉堂文庫美術館）（以下、静嘉堂本）の影響が橘寺本の図像に認められることを新たに指摘する。さらに、これらの図像が選択された経緯を辿り、本作が法隆寺を中心として制作された「法隆寺式」ともいふべき太子絵伝の系譜に名を連ねる作例である可能性について掘り下げたい。

1. 作品概要

橘寺は奈良県高市郡明日香村にある聖徳太子ゆかりの寺院である。用明天皇の旧邸が置かれていたとされ、太子誕生の地として古より仰がれてきた。創建期は不詳だが、寺院縁起によれば推古天皇14年（606）7月太子が勝鬘経講讃を行なった折に、山上に仏頭が顕現し三尺ばかりの蓮華が舞い散った奇瑞にちなみ、寺塔が建立されたという²。橘寺は当初法隆寺の末寺であったが、その後承暦年中（1077-81）に醍醐寺末寺へ³、治承4年（1180）の南都焼亡後に興福寺一乗院末寺へ⁴、さらに15世紀には同寺大乗院末寺へと移管した⁵。

橘寺には八幅一具の聖徳太子絵伝が伝来する。掛軸絵伝としては十幅本に次ぐ規模の構成である。法量はおよそ縦191.6cm、横116.1cmであり、三幅の絵絹を継ぎ一鋪とする⁶。状態は極めて良好であり、質の良い顔料を用いた鮮やかな賦彩による画面は非常に明るく澄んでいる。各事蹟は、

奇数幅では上から下へ、偶数幅では下から上へと年次に従い蛇行的に配され、およそ 83 もの事蹟が描き込まれる。随所に配された水流や山崖が事蹟場面を転換させる装置として機能しているため、画面に窮屈な印象はない。札銘の内容は、太子伝の集大成である『聖徳太子伝暦』（917）（以下、『伝暦』）に則し綴られたものが大多数を占め、図像は致貞本や但馬房本を忠実に伝模したものが多く認められる⁷。本作の成立時期については絵画様式の観点から室町期とするのが大方の見解である。享徳 3 年（1452）に制作された同寺の詳細な宝物帳に本作に関する記載が見出せないことから、これをあまり下らない時期に制作されたものと想定される⁸。

本作では第一幅における誕生の場面や第七幅の勝鬘経講讃などの橘寺を舞台とした出来事が、他の事蹟と比較し大きく描かれる。また、南に向かって合掌する太子（二歳）が彫像の南無仏太子像を模して台座に乗る異例の図像で表される点や⁹、他本稀に見る父の病氣平癒を祈祷する太子（十六歳）が図像に認められる¹⁰ 点からは、これらの初発的彫像を制作した橘寺の功を顕示するという意図が窺える。以上の観点から、本作は橘寺による作例とみて良いだろう。

橘寺本は、絵伝制作時における随一の手引書である『伝暦』に則した札銘と、既往の太子絵伝の紙本に倣い描き出された図像によって構成される。このため、太子信仰の規範を遵守した好例といえる反面、興趣に欠ける憾みがあり、これまでの研究においても橘寺本を形式的な作例とする指摘がなされてきた¹¹。しかし、遠方での出来事を意図的に画面最上段に据える構図への配慮や、建築や自然の景物による各事蹟の巧みな配置は注目に値するものがあり、本作は太子信仰の定石を踏まえつつ、画面構成等に独自の工夫を凝らした労作であると評価できる。

本稿執筆にあたり橘寺本の事蹟配置図を作成することで、本作における図像が致貞本、但馬房本を範とするのみならず、法橋本および静嘉堂本に通ずる特徴を有する実態が浮かび上がってきた（図 1）。これらの図像選

択には一定の規則性が見出せるのみならず、上記4件の太子絵伝の図像が橘寺本に選択された淵源を辿ると、本作制作時に橘寺が末寺として従属していた興福寺の存在が浮かび上がってくる点についても敷衍し論じたい。

2. 橘寺本にみる図像選択の規則性

1. 致貞本および但馬房本からの図像選択

橘寺本に図像が見出せる致貞本（1069）や但馬房本（1305）は、法隆寺での制作が明らかな基準作とされる作例である¹²。しかし、両作の図像がどのような具合で橘寺本に採用されたかについては、これまで具体的に論じられてこなかったため、ここで述べることにしたい。

橘寺本の図像は、致貞本のもを基底として展開する。ただし、制作段階において致貞本の剥落の程度がすでに甚だしく図像判別が難しいと判断した場合については、但馬房本の図像に倣っていたことが分かった。

まず第一幅右上に描かれた母妃が金色僧の夢を見て懐妊する場面に着目したい。画面奥に父皇子が臥し、その手前に母妃が横たわり、彼女の枕辺に金色の僧が描かれる。これは当該事蹟を表す常套的図像だが、稀な特徴として本場面に描かれた建物の開口部が全て御簾に覆われるといった図像の存在が挙げられる。こうした特徴は致貞本に酷似するものであるため、

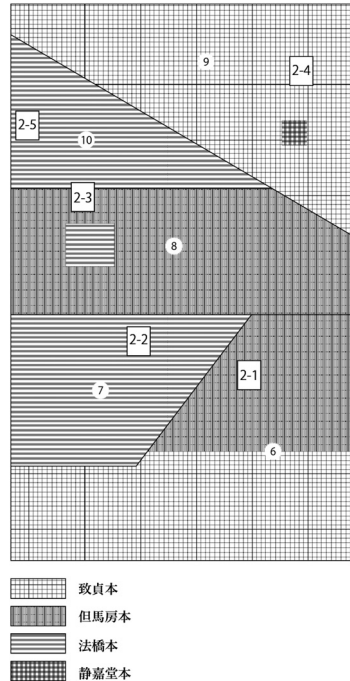


図1 事蹟配置図（橘寺本《聖徳太子絵伝》第二幅）

これを踏襲したと考えて差し支えないだろう。構図には致貞本を範とするが、その室内に描かれる母妃が画面奥の父皇子の方へ顔を向けるように仰向けになり、父皇子が枕に頬をつけ首をややかしげるようにうつ伏せる姿には、但馬房本の図像と合致する特徴が見出だせる。現状からの考察に留まるが、致貞本の当該場面は橘寺本の制作時すでに剥落が激しく、室内に描かれた人物像をほとんど判別できない状態であったため、但馬房本の図像が参考とされたという経緯が想定される。致貞本が 14 世紀に二度の修復記録を残す点からは、当時すでに作品状態が芳しくなかったことが看取される¹³。橘寺本第六幅における太子三十五歳楓野行啓の場面についても同様の指摘が可能である。太子の乗る輦を中心とした一行が菟途橋を渡り、蜂岡に造られた仮の宮に向かうまでの構図は、致貞本を踏襲する一方で、輦を取り囲むようにして歩を進める群臣の姿形は、但馬房本に見受けられる人物の特徴との完全な一致をみせる。

ただし、構図の適切さにより、こうした致貞本、但馬房本の優先度が逆転することもあったようだ。

例えば群臣に先んじて皇后を拝する場面（五歳）は、致貞本、但馬房本ともに剥落などがなく判別可能な図像が残される。先程の法則に従えばここでも致貞本の図像を採用するのだが、本場面ではこの関係性が逆転し、主要部分の構図に但馬房本を用い、これに情趣を添える要素として致貞本に基づく束帯姿の群臣が庭先に控える様子が加えられる。このように両本の優先順位が逆転した背景として、橘寺本の構図上の問題が影響していると考える。本場面（五歳）の右方には、自ら進んで父の咎を受ける四歳の場面があり、これら二つの場面はひとつの建物を共有する形で描かれる（図 2）。この四歳の場面では、太子が画面左へと伸びる廊に座して天皇と対面する致貞本の構図が採られる。この左手前まで延びる廊が件の五歳の事蹟を展開する左方の空間を手狭なものとしているため、左に直交する構図を強いられた五歳の画面には、庭先から主殿にかけて扇型に展開される



図2 橘寺本 第一幅 四歳自ら進んで父の咎を受ける（画面右）・五歳群臣に先んじて皇后を拝す（画面左）

致貞本の構図ではなく、左へと伸びる斜め構図を用いた但馬房本が適当と判断されたのだろう。

2. 図像選択に関する新知見

橘寺本に致貞本および但馬房本の図像が見出させる点は先より指摘されてきたが、橘寺本を実見したところ、上記2件の作例に加え法橋本および静嘉堂本の図像を新たに見出し得た。

各作例の図像の採用頻度について整理すると、先に掲げた致貞本がもっとも高く、次に但馬房本、そして法橋本、静嘉堂本となり、これを分類するとおおそ三つの階層によって図像選択がなされていたことが分かった。つまり、大前提として致貞本の様に依拠しつつ（第一層）、同本図像の判別が困難な場合あるいは前者より構図の点において適していると判断した場合に但馬房本を（第二層）、上記の作例のいずれにも見出だせない事蹟、あるいは構図の点において適切であると判断した図像を、法橋本や静嘉堂本から引用する（第三層）といった図像採択の段階があったとみられる。

(1) 法橋本からの図像選択

それでは実際に法橋本の図像が橘寺本に用いられた事蹟を見ていきたい。

法橋本は現在四天王寺に蔵される六幅一具の太子絵伝である。本作は付属する裏貼り文書により元亨3年（1323）の作とされるが、後補の文書であるため真偽のほどは定かではない。ただし、絵画様式から元亨年間の作例として格別に矛盾しないという見解がなされているため、本稿でも法橋本を14世紀前半の作例として扱う¹⁴。

図像比較を通し、橘寺本の事蹟のうち10場面ほどが法橋本の図像を用いていることがわかった¹⁵。このうち先に提示した三階層による図像選択の一端が窺える事蹟を2点挙げたい。

まずは致貞本や但馬房本に事蹟が描かれない場合に、次なる手として法橋本の図像が用いられたと分かる箇所を見ていく。新羅の間諜を捕える場面（三十歳）は、致貞本や但馬房本に見受けられないばかりでなく、法橋本の他、愛知・本證寺本、同・勝鬘皇寺本、滋賀・中野太子堂本、京都・六角堂頂法寺本と6件の絵伝に見出だすに留まる稀な事蹟である。橘寺本では拘束された間諜2人とこれを捕らえた群臣3人の姿が描き出され、このうち間諜2人とその後ろで縄を握る群臣1人は法橋本と寸分違わず図像が合致する。この他の群臣2人は体の向きなどが法橋本と一致しないものの描かれた位置が近似しており、他本に同様の図像が見出だせないことから法橋本からの引用とみて良いだろう。橘寺本の画面に法橋本の図像の存在を明確に見出だすことのできる好例といえる。

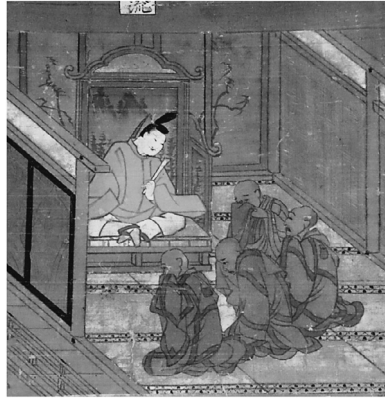
次に法橋本の図像が橘寺本に採用された事蹟を見ていく。橘寺本における百済僧十人が漂着する場面（三十八歳）の場面では、画面左方の礼盤に太子が座し、その右手前に百済僧が描かれる（図3）。これと同様の構図は但馬房本と法橋本に見られるが、詳細に比較すると人物の表情に違いが見受けられる（図4・5）。すなわち、但馬房本が感情を表出せず向かい合



3



4



5

図3 橘寺本 第七幅 三十歳百済僧十人が漂着する

図4 但馬房本 第二幅 三十歳百済僧十人が漂着する (Image: TNM Image Archives)

図5 遠江法橋《聖徳太子絵伝》 第五幅 三十歳百済僧十人が漂着する

う太子と僧を描くのに対し、法橋本では両者が面会に感涙する姿が描かれる。こうした法橋本の感情表現への機微が、選択の決め手となったのだろう。橘寺本には法橋本に倣い、僧たちが感涙にむせぶ姿が表現される。太子を囲むように4人が床に座し、画面奥から正面に顔を向け袖で口を押さえる僧、慈しみを込めた眼差しを太子に向ける僧、さらにその左の背を向け肩を震わせるように泣く2人の僧の姿は、いずれも法橋本の図像と合致する。しかし太子の姿形については、自らも落涙する姿の橘寺本と左手に笏を執り僧たちを見遣る姿の法橋本では明らかに異なる図像が選択されている。この橘寺本に採用された右手で笏を執り左の袖で涙を拭う太子の姿は、法橋本における恵慈の帰国の場面（四十四歳）に見られる太子のそれと酷似している（図6）。年次の近さ、そして太子と僧が対面し涙を流すという事蹟の類似性から、この太子の図像が転用された経緯が推測される。図像の引用が同事蹟に限らず、他の事蹟からもなされていた点からは、橘



図 6 法橋本 第五幅 四十四歳恵慈の帰国の場面

寺本制作者の事蹟表現に対する細やかな配慮が窺える。

(2) 静嘉堂本からの図像選択

最後に静嘉堂本の図像が選択された橘寺本の事蹟を見ていく。

橘寺本での静嘉堂本の採用傾向を辿ると、構図ではなく人物像などの比較的細部に図像が用いられていることが分かる。上述した 3 件の作例に比べ本作の図像採用は補足的であり、優先順位としては低かったと考え

られる。

静嘉堂本はかつて愛知県満性寺に伝来した絵伝であった。先に述べた法橋本と絵画様式上の近似性が認められるため、成立時期は法橋本と同様 14 世紀前半に据える。

橘寺本では 3 場面に静嘉堂本の図像からの引用が確認できる¹⁶。本稿ではこのうち、九歳と十四歳の 2 場面を取り上げたい。

まず橘寺本における熒惑星の現れる場面（九歳）に着目し、複数の太子絵伝の中から、静嘉堂本の図像が採用されるに至った経緯を見ていきたい。橘寺本の本場面右下には家屋があり、そこから画面奥へと伸びる洲浜の先には幽遠たる海が広がる。本場面では屋根に座る熒惑星の存在に気づく屋内の土師連八嶋の姿と、海上に入る菩薩形の熒惑星を見届ける土師氏の姿が異時同図法を用いて描かれる。本場面の構図や図像の多くは致貞本のものを踏襲するが、室内に座す土師氏の姿は例外的に静嘉堂本の図像を用いて表される（図 7）。この理由の一つとして致貞本の家屋が無人であることが挙げられるが、これに加えて静嘉堂本に描かれる土師氏の姿形が他

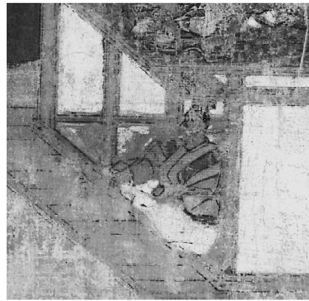
の作品に比べ物語性を包含していると見なされたものと考ええる。つまり、但馬房本や法橋本における土師氏が何とは無しに海上を見つめる姿であるのに対し（図8）、静嘉堂本の同氏は、屋根の上の熒惑星を凝視するような姿で描き出される点において、頭上から聞こえる熒惑星の声に当惑する同氏的心情をより明確に伝えている。橋寺本の図像の選択には、このような物語の叙情性に注目する制作者の意図が介在する。

最後に橋寺本における物部守屋が堂塔仏像を破壊する場面（十四歳）を取り上げ、但馬房本の図像を用いた画面の一部が意図的に静嘉堂本に改められている点に着目し、静嘉堂本図像の部分的引用を例示したい。

橋寺本の当該場面は、但馬房本の構図に則して画面手前に五重塔、奥に金堂が描かれる。通常であれば人物についても但馬房本のものがここに描かれるのだが、本場面ではこれを敢えて用いず静嘉堂本の図像が描き出される。例えば静嘉堂本におけるもろ肌脱ぎし塔の初層で松明を持つ男と、その横で破壊した扉絵を持ち上げ前傾する男は、橋寺本同場面奥の金堂正面に存在し、同様に静嘉堂本の画面左に描かれた馬上の人物ならびに半身で刀を構える片肌脱ぎの男は、橋寺本画面右の五重塔の傍に姿を現す。但馬房本ではなく、静嘉堂本の図像が用いられた背景には、個々の人物の動きに簡明な特徴が見出せたことが挙げられるのだろう。橋寺本では、こうした静嘉



上：図7 静嘉堂文庫美術館所蔵 第一幅 九歳熒惑星が現れる（部分）



下：図8 但馬房本 第二幅 九歳熒惑星が現れる（部分）
(Image: TNM Image Archives)

堂本の人物を上述のごとく但馬房本の構図上に効果的に再配置している。

ここまで見てきたように、橘寺本には法隆寺献納宝物の太子絵伝二種に加え、新たに法橋本および静嘉堂本の図像の存在が認められた。図像選択においては致貞本、但馬房本、法橋本および静嘉堂本という三段階のレベルがあり、基本的にはこの順序に従って優先的に図像の選択がなされるが、構図や図像の観点から橘寺本に適切と判断された場合には、この順序に限らない柔軟な図像選択がなされていた。法橋本や静嘉堂本の図像がその他二種の太子絵伝に比べ、人物表現等に限定した部分的な借用がなされていたことから、あくまでも法隆寺において制作がなされた致貞本と但馬房本の二つの図像を忠実に描き出すことに注力した姿勢が窺える。

3. 図像選択に介在する意図

ここまで、橘寺本の図像選択にみる規則性について確認してきた。この作業によって、従来指摘されてきた致貞本ならびに但馬房本の図像が、橘寺本の大部分を構成する要素であることが改めて了解された。これに加えて本稿では、人物表現等の部分的な箇所に応用された図像として、新たに法橋本ならびに静嘉堂本の図像の存在を作中に見出だした。橘寺本に多用される図像が致貞本や但馬房本などの法隆寺伝来の作例であることから本作が同寺を重要視していた背景が窺えるが、その他二件の作例については、採用された所以が未だつまびらかではない。法橋本や静嘉堂本の図像は如何なる経緯によって橘寺本に組み込まれたのか。これを読み解くための端緒として、両作の伝来について私見を述べたい。

1. 法隆寺に伝来した六幅本聖徳太子絵伝と法橋本

『本朝画史』（1697）中に法橋本が17世紀まで法隆寺に伝来していたことを示唆する記述が、近年の研究によって見出だされた¹⁷。本史料では

「和州法隆寺ニ有り聖徳太子ノ行状六幅」という文言が記されるが、現在の法隆寺に六幅の太子絵伝は伝来していない。現存する六幅本が法橋本および京都・六角堂頂法寺本（室町時代）の2例とごく僅かであることから、本書の記す「聖徳太子ノ行状六幅」が法橋本である可能性は高いと言える¹⁸。四天王寺支院施行院住職の南谷恵敬氏は法橋本の伝来した時期を元禄年間（1688–1704）としており¹⁹、法橋本が四天王寺へと移る17世紀まで法隆寺に所蔵されていたとする『本朝画史』の記述はこれと時期的な辻褄が合う。橋寺本に採用される図像のうち致貞本、但馬房本に続き、法橋本までもが法隆寺における太子絵伝の系譜に属しているとすれば、本作制作者が法隆寺の太子絵伝の図像に精通していた人物であった可能性が浮上する。その人物像を特定する手がかりとして、次に静嘉堂本の採用意図について記したい。

2. 尊智筆二幅本聖徳太子絵伝と静嘉堂本

静嘉堂本の図像を淵源とした太子絵伝には、二幅本の作例として奈良・大蔵寺本（南北朝時代〔14世紀〕）と米・メトロポリタン美術館本（鎌倉～南北朝時代〔14世紀〕）の2件が挙げられる²⁰。両作は、静嘉堂本を伝模した図像がほとんどを占めるが、一部に静嘉堂本のみならず太子絵伝のどの作例にも見受けられない、両本間にのみ呼び合う図像が認められる²¹。これは、二幅本が静嘉堂本と酷似した他の作例に倣い、制作がなされたことを示唆しているように捉えられる。

『本尊目六』には興福寺一乗院松南院座の祖師と仰がれる尊智法眼の手による二幅本聖徳太子絵伝が興福寺に伝来していた旨が記録される²²。つまり、現存作例の中でも稀な二幅本の太子絵伝を南都絵所の鼻祖と仰がれる尊智が制作し、その作品が興福寺に継受されていたという。現存する大蔵寺本、メトロポリタン美術館本2つの二幅本が仮に静嘉堂本ではなく、それをさらに遡る13世紀を生きた尊智による二幅本太子絵伝の図像を継

承していたとするならば、橘寺本に見られる四種の絵伝の図像は、いずれも法隆寺や興福寺など、本作が制作された 15 世紀当時興福寺の末寺であった橘寺と近い関係にあった寺院の所蔵する作例を参考としたものと解釈される。尊智率いる南都絵所は、法隆寺や興福寺において太子信仰にまつわる絵画制作に携わっていた記録が多く残される²³。ゆえに致貞本や但馬房本などの粉本を持ち合わせていた可能性は高い。以上を踏まえると橘寺本の制作へも彼らが関与したものと想定できるが、憶測の域を出ないため今後の研究課題としたい。

4. 結びにかえて

本稿では橘寺本に見出させる図像について、従来指摘がなされてきた二種の太子絵伝に加え、新たに法橋本と静嘉堂本からの引用を明らかにした。図像の選択には一定の規則性が見られ、法隆寺伝来の作例二種にあくまでも忠実な画面を描き出すことに眼目が置かれていた。また、法橋本ならびに静嘉堂本の伝来を巡り、前者が法隆寺の伝来である可能性を指摘し、後者については橘寺本が本寺とする興福寺所蔵の二幅本太子絵伝と図像が一致する類似作例であると推定した。

興福寺末寺である橘寺が、積極的に法隆寺の図像を用いた作例が制作された背景には、先駆作例への単なる憧憬ではない、法隆寺に深く根を下ろした興福寺の南都絵所による「法隆寺式」ともいうべき、精神性を感じ取ることができるのではないか。本稿では橘寺本に採用された図像の傾向から、制作に関与した人物像について検討したが、その特定には至らなかった。今後は本作の絵画様式などにも焦点を当て掘り下げていきたい。

注

¹ 朝賀浩〔作品解説〕『聖徳太子展』NHK, NHK プロモーション発行, 2001 年, p. 82.

² 『聖徳太子伝暦』34 歳条「勝鬘経を講ず」, 延喜 17 年 (917)。

- ³ 『顕真得号口訣抄』応安 5 年〔372〕鈴木学術財団編『大日本佛教全書』71 巻、史伝部 10、鈴木学術財団、1972 年より引用。
- ⁴ 『簡要類聚鈔』（京都大学蔵一乗院文書）（鎌倉時代中期）
- ⁵ 尋尊『大乘院寺社雜事記』文明 11 年（1479）5 月 13 日条。
- ⁶ 橘寺本法量（縦×横 cm〔左からの絹幅〕）
一幅：191.6×116.1〔39.1, 39.5, 37.5〕
二幅：191.7×116.1〔38.5, 38.9, 38.7〕
三幅：191.6×115.8〔37.4, 39.8, 38.6〕
四幅：192.4×115.7〔39.4, 38.3, 38〕
五幅：192.1×115.8〔38.1, 39.6, 38.1〕
六幅：192.3×116.5〔38.2, 40.2, 38.1〕
七幅：192.4×116.6〔39.8, 40.6, 36.2〕
八幅：192.1×116.9〔39.2, 39.4, 38.3〕
- ⁷ 菊竹淳一〔作品解説〕『日本の美術 第 91 号 聖徳太子絵伝』至文堂、1973 年、p. 110-111。
朝賀浩氏、前掲註 1。
- ⁸ 菊竹淳一氏、前掲註 9。
- ⁹ 二歳十五之平旦向東方事附南無佛像
太子二歳御影、最初形像縁起事、訓覺日記云。
菩提寺二歳御影、是日域最初御影也（省略）此砌太子御誕生處、專二歳御影可奉安置之靈場也。
南無仏二歳像は橘寺で初めて造形化された旨が記される。
（法隆寺本『太子伝玉林抄』〔1447〕四十二歳条、東方書院『太子傳玉林抄』東方書院、1929 年より引用）
- ¹⁰ 橘寺本での十六歳孝養像の造像が、埼玉・天洲寺像（1247）と並ぶ最初期の作例として、嘉禎 4 年（1238）に同寺の修造勸進に際してなされたことが指摘される。橘寺本における当該事蹟の構図は法隆寺献納宝物十面本に拠る。本作では建物に新たな一室を設け袈裟を纏った太子の姿を描き加えている。（瀬谷貴之〔巻頭論考〕『聖徳太子信仰—鎌倉仏教の基層と尾道浄土寺の名宝』神奈川県立金沢文庫、2019 年、p. 8-9。）
- ¹¹ 但馬房本に太子が三経に関する事蹟を数多く選択していることから、勝鬘会の講師のための房である西室講師坊が嘉元 3 年（1305）に造営されたことに際した制作出会ったことを指摘する。（梅沢恵「法隆寺献納宝物四幅本聖徳太子絵伝について」『日本美術史の杜 村重寧先生星山晋也先生 古稀記念論文集』竹林者、2008 年、p. 205.）
- ¹² 源豊宗「初期大和繪としての御物語聖徳太子繪傳」『佛教美術』佛教美術社、1931 年 12 月。

- ¹³ 致貞本屏風裏の記録によると、建武 5 年 (1338)、康暦 2 年 (1380) の二度にわたり修復が行われている。(源豊宗氏, 前掲註 14)
- ¹⁴ 梅津次郎『四天王寺蔵聖徳太子絵伝二種』『仏教芸術 特集・四天王寺』56 号, 1965 年 1 月.
- ¹⁵ 法橋本からの図像選択が行われた事蹟は、この他に自ら進んで父の筈を受ける場面 (四歳)、蝦夷を鎮撫する場面 (十歳)、戴冠の場面 (十九歳) などが挙げられるが、これらは南都系太子絵伝の典型的な図像でもあるため、法橋本からの直接の引用であるとは断定できない.
- ¹⁶ 上述した 2 場面のほか、再び勝鬘経を講ずる場面 (四十六歳) が挙げられる.
- ¹⁷ 瀬谷愛『法橋本作品解説』『名作誕生—つながる日本美術』朝日新聞社, 2018 年, p. 262.
- ¹⁸ 「住吉法眼姓名ヲ知ラズ、佛像人物ヲ善クシ兼テ花草ヲ能クス、畫法宅間ニ比スレハ則チ稍草ナリ、和州法隆寺ニ聖徳太子ノ行狀六幅又當麻寺ニ中將姫ノ縁起二幅有り」『本朝画史』狩野永納撰, 延宝 6 年 (1697) 版本は出版年不明, 早稲田大学図書館.
- ¹⁹ 南谷恵敬「聖徳太子伝の絵画化—聖徳太子伝の展開—」『国文学解釈と鑑賞』54 号 10 月, 至文堂, 1989 年 10 月.
- ²⁰ 上述した 2 件に加え、四天王寺に所蔵される真宗系の図像を有する作例が現存するが、本稿では上記の南都系太子絵伝に類別される 2 件を指して二幅本と称することとする.
- ²¹ 蝦夷を鎮撫する場面 (十歳) など.
- ²² 「上宮太子傳 二鋪 尊智法眼筆 自光林院英暹方傳之」興福寺大乘院法務大僧正尋尊 (1430–1508)『本尊目六』『美術研究』第 58 号, 岩波書店, 1936 年 10 号.
- ²³ 法隆寺においては、金堂に安置される『阿弥陀三尊像』の台座浄土図や『六角厨子』背面の補陀落山浄土図にみられる山水描写が、法隆寺絵堂絵伝 (致貞本) における表現と類似していることから、当時これらの紙形を所持していたであろう南都絵所の制作への関与が指摘されている。(谷口耕生「鎌倉時代やまと絵の形成—尊智・円伊・高階隆兼」『日本美術全集 第 8 巻 中世絵巻と肖像画』小学館、2015 年, p. 189.190)

図 版 出 典

図 8.4 は東京国立博物館画像検索 <https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/index> (画像番号: 2-a, E0016591, 2-b, E0048688). その他の図は筆者作成・撮影による.